

「主に従う人よ」

旧約 詩編 33編 1節～22節

- 1、「新しい歌を主に向かって歌い」は旧約の馴染み深いフレーズです(詩96, 98, 144, イザヤ42:10)。新しい歌とは何でしょうか。「新作」ではありません。古くからの歌であるのに、記憶と共に新鮮な歌のことです。「沈むばかりのこの身を守り、天の港に導き給え」(讃273B)を人生の最末期に涙で応答された知人と共にこの歌は私にとって「新しい歌」です。
- 2、旧約学者勝村弘也氏の注解に、「神のなされる業の新しさに対応する人間の側の、神体験の新しさと関係する」(p.24)とあり、関根政雄氏は「造り主なる神を新たなる年の始めに讃たたえ、契約を更新することと関係している」と述べます。T. ボーマン「ヘブル人とギリシャ人の思惟」ではギリシャ人の円環的思考でもなく、ヘブル人一般的の「創造-啓示-終末」という直線的思考でもなく、「朝があって、夕べがあった」(創世記1章)のリズムで捉える「新しさ」だと述べられています。
- 3、詩編33編には旧約の懐かしい歴史の文言が繰り返されています。民族の長い信仰の歴史がリズムと共に甦ります。例えばダビデの「十弦の立琴」(2)、  
「主は正義と公平を愛される」は予言者を、「もろもろの天は主のみことばによって造られ」はヨブ記(38:8)を想像させる創造論の文言です。  
10節以下は、歴史の中での救済論の文言が見られます。「主は国々の計らいを砕き」(イザヤ48:13)、「彼らの業をことごとく見分けられる」(同41:1)、「我らの魂は主を待ち望む」(同8:17)。この歌は、イスラエル民族が国家の滅亡を経験し、バビロニヤ捕囚を経た後に、その主要思想を概観しつつ、教育的意図で構成された「いろは歌」だとも言われています。この詩は基本では「神を賛美する詩」ですが、神の創造の初めに立ち返ること、歴史における救済を、想起することを、リズムとして繰り返して、生活に体験化させる意図を持っています。「新しい歌」がこの歌のことなのです。
- 5、「岡安信男氏指導賛美歌を歌う会」に出て思ったことです。参加の方は学生時代、この方の指導で歌う喜びと楽しさを身に付けた方たちです。讃美歌は古い福音唱歌のシンプルな歌でした。魅力は、岡安さんの「ワン、トゥー、スリー」という掛け声で始まるリズムの瑞々しさです。
- 6、詩編の作者は、イスラエルの歴史を思い、もう一度、歴史を貫くリズムを共有することを訴えています。「主に従う人よ、主によって喜び歌え」
- 7、アメリカで反戦平和や人権保護を訴えるデモでは「we shall overcome」がよく歌われます。ルーサー・キング牧師を先頭にした公民権運動が新しく想起され、またベトナム反戦運動が思い起こされます。私には、ジョン・パエズが岩国でこれを歌ってベトナム反戦の人々を励ましたことが、甦って来ます。自らの内にある「新しい歌」を大切にしたいと思っています。